

学習支援船による富岩運河周辺地域における 持続的な賑わいづくりに関する考察

植原 徹

都市計画部門 都市計画・環境系グループ 課長代理（一級建築士）

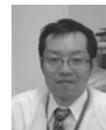
E-mail: uehara@shinnihon-cst.co.jp



大門 健一

都市計画部門 都市計画・環境系グループ 課長（技術士 建設部門-都市及び地方計画）

E-mail: daimon @shinnihon-cst.co.jp



Key Words: まちづくり、持続可能性、活性化、社会実験、ストック活用、官民協働

1. はじめに

社会の成熟化に伴い、まちづくりの目的も「開発による（一時的な）活性化」から「マネジメントによる持続的な活性化」へと移行しはじめている。

このような状況の中で、県都富山市の都市基盤のひとつである富岩運河では、豊かな水辺空間を活かした賑わいづくりの一環として、学習支援船運航社会実験が実施されているところである。

2. 学習支援船運航社会実験の概要

(1) 富岩運河における賑わいづくりの概要

富岩運河では、昭和50年代後半より富岩運河環水公園をはじめとする水辺空間の再整備が進められてきた。平成20年度には「～松川・富岩運河周辺地域～水辺のまち夢プラン」が策定され、その推進母体である「水辺回廊推進協議会」での継続的な議論を通じ、ハード・ソフトが一体となった水辺空間の魅力づくりが展開されている。

(2) 学習支援船運航社会実験の概要

学習支援船運航社会実験は、「富岩運河の歴史や環境学習の促進」と「賑わいづくりや観光振興」を目的とした、富山県及び富山市の共同による船舶運航事業である（通称「富岩水上ライン」）。

社会実験では、環境に優しいソーラー船「sora」

と電気ボート「もみじ」の2隻の船舶を活用し、富岩運河環水公園と岩瀬カナル会館を結ぶルートを運航している。主な魅力は、約2.5mの水位変化を体験でき国指定重要文化財でもある中島閘門と、地元住民等による船上ガイドである。平成22年11月末までの約2年間に累計22,217人が乗船するなど、船舶の運航による富岩運河周辺地域における一定の賑わい創出効果を確認できた。

なお弊社では運航管理業務として、乗船実績及び運航サービスに対する乗船客評価を分析するとともに、将来的な運航事業の民間移行に向けた事業改善策の検討等を実施している。



図-1 ソーラー船「sora」（中島閘門の通航体験）



図-2 電気ボート「もみじ」

3. 持続的な賑わいづくりに向けた課題

運航事業の継続や富岩運河周辺地域での持続的な賑わいづくりに向けては、以下のような課題があると考ええる。

① 集客サイクルの確立

一定量の運航サービス利用者を獲得し続けるには、集客サイクルの確立が不可欠である。

② 事業の収益性の確保

運航事業を継続的に実施するには、事業改善に必要な一定の収益の確保が必要である。

③ 地域としてのブランド力の強化

富岩水上ラインを含めた富岩運河周辺地域への来訪者の底上げには、地域としてのブランド力の強化が必要である。

4. 課題についての考察

(1) 顧客の視点からのサービス改善

① 新規顧客の開拓に向けた広報施策の改善

これまでは、主に運航に関する基本情報（運航期間、ダイヤ、料金等）の提供に注力してきたが、顧客の立場からみると、富岩水上ラインを利用することの価値がイメージしにくい内容であった。

このため、新規顧客の開拓に向け、顧客の利用目的や属性に応じた楽しみ方の例示や、利用者の声（評価）の掲載など、顧客に具体的な利用イメージを想起させ、利用を促すための情報を充実することが重要と考える。

② リピーターの利用促進に向けたサービス改善

これまで、運航ルートの改善等により、一定量のリピーターを獲得することができた。一方で、不特定多数の乗客を対象に船上ガイドを実施する必要があるため、リピーターにとっては、必要とする情報が十分に得られない可能性が高い。

このため、リピーターの利用促進に向け、テーマ性の高い便の試行や乗船するガイドの特長に関する情報提供など、リピーターのニーズにきめ細かく対応できるようサービス手法を改善することが重要と考える。

(2) 民間事業の視点からの事業改善

① 運航業務の効率化

運航事業の事業構造は、労働集約的な性質が強いいため、特に従業員による発券及び乗船作業の効率化が経営改善の大きな鍵となる。

このため、運航業務の効率化に向け、社会実験を通じた従業員の業務スキルの向上とともに、作業の一部のIT化を含めた作業手順の改善に取り組むことが重要と考える。

② 収益力の強化

事業主体が一般顧客から得られる収入は、社会実験の性質上、現在は運賃収入に限定されている。

このため、社会実験後の収益力の強化に向け、飲食業者や旅行業者等との連携によるサービスの高付加価値化に取り組むことが重要と考える。

(3) 地域の視点からの魅力強化

① 統一コンセプトに基づく魅力強化

富岩運河周辺地域では、多様な事業・活動が実施されているが、地域全体の魅力強化には、統一的概念に基づく取り組みが重要になる。

このため、統一コンセプトに基づく魅力強化に向け、「水辺回廊推進協議会」の場で実施内容を継続的に調整することが重要と考える。

② 地域資源の魅力強化

現在ある地域資源は、「モノそのものの価値」（独自性や希少性）が目されることが多く、その整備や再生に懸ける住民や技術者の想いや活動などの「文化的価値」の印象が相対的に薄い。

このため、地域資源の魅力強化に向け、運河の整備や再生に関する歴史研究や保全活動の記録化など、「人の想いや活動」を価値化する取り組みを推進することが重要と考える。

5. まとめ

学習支援船による賑わいづくりは緒に就いたところであり、課題も多岐に渡るが、次代の地域活性化モデルとなるよう、課題解決に向けた取り組みを着実に実施していく必要があると考える。